教育研究の構想

平成20年度に実施した意識調査と同じものを今年の７月に実施した。その分析かつ考察については，先に述べたとおりである。そこから見える子どもの変容や本学校園の基本理念や基本目標をふまえ，本学校園がめざす子どもの姿にむけて，今後さらにこの研究を推進し，深めていく必要があると考えている。

1　研究主題

島根大学教育学部附属学校園　研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究

(1)「豊かな『社会生活』を創造する」とは

①定義

まわりの人々や環境と共生し，お互いに磨き合い，よりよいくらしを創り上げると共に，よりよい自分を創り上げる。

人間は一人では生きていけない。自分をとりまくまわりの影響を受け，また，自らも社会に影響を与えながら生きていく。その時，一人ひとりがよりよい影響を受け，よりよい影響を与えることで，「社会生活」そのものが「豊か」になる。

本学校園では，その「豊かな『社会生活』を創造する」を具体的な子どもの姿として考え，４歳児から意識し，義務教育の最終年である中学３年までの11年間でその姿を育もうと考えた。

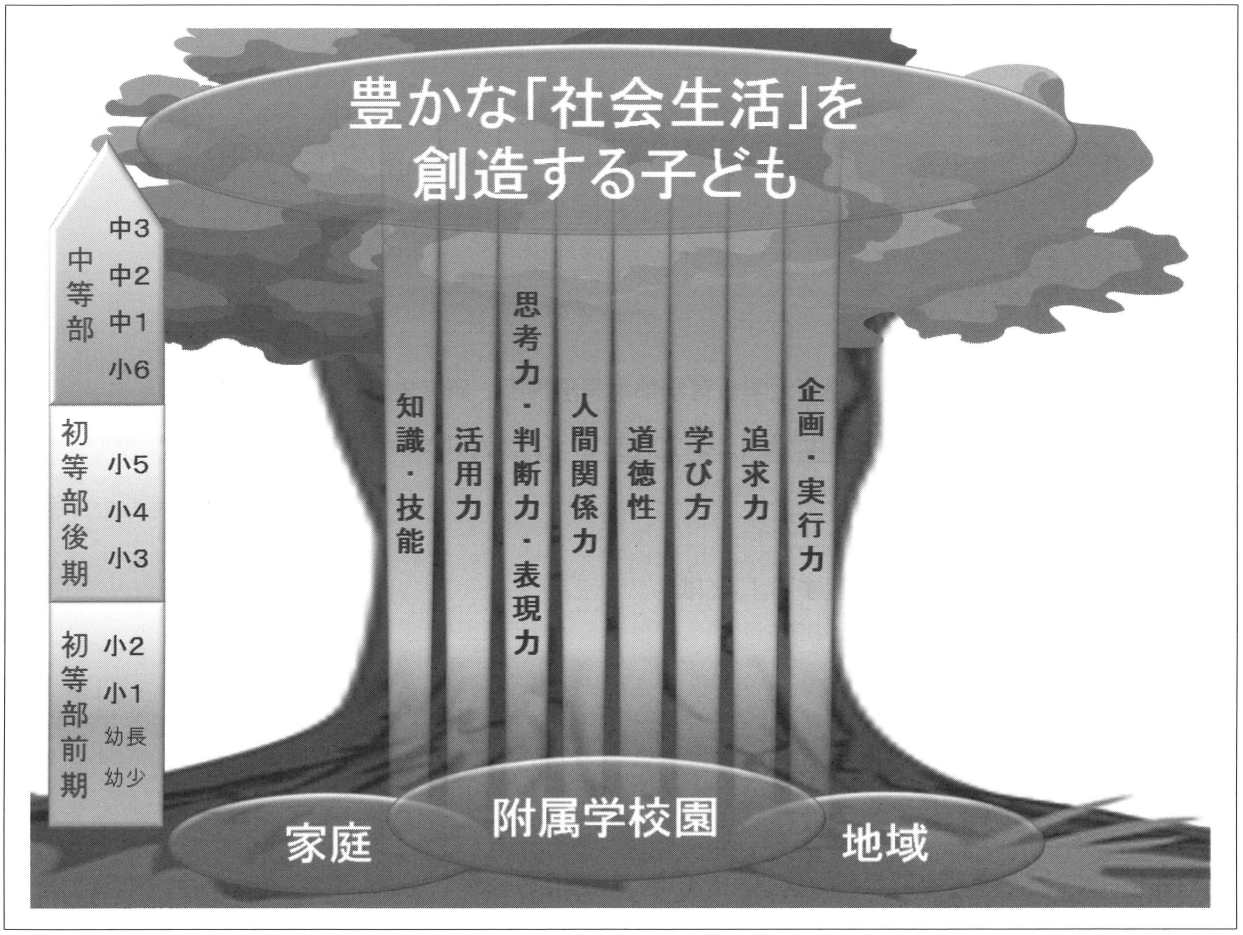
そのためには，互いに尊重し合う人間関係をつくり，基礎的・基本的な知識や技能に裏打ちされた思考力や判断力や表現力という確かな学力をいかしながら，人々のくらしや環境，社会の諸問題に目を向け，実践していける資質や能力などを子どもたちに育んでいく必要がある。そこで，子どもたちの学びにおいて，より具現化した資質や能力などを本学校園では次のように構造化してとらえた。

②「豊かな『社会生活』を創造する」資質や能力の構造

平成22年度までは，「確かな学力」の育成を保育・教科で，「社会力」の育成を研究領域を中心に考えてきた。「社会力」の育成について，詳しくは３(2)「昨年度の研究から見えてきたこと」の中で述べるが，研究を進める過程で「社会力」における資質や能力が，教育活動全体を通じて育てられるものであることがより一層明らかになってきた。そして，それは本学校園の研究の主題にもある「豊かな『社会生活』を創造する」を定義した考えと非常に関わりが深い力であることが見えてきた。そこで，今年度はこれまで考えてきた「社会力」を豊かな「社会生活」を創造する子どもを育成するための資質や能力に含め教育活動全体を通じて育てるものとして整理した。

また，整理する上では，前項で述べた本学校園の子どもの現状をふまえた。そして，次の構造図で，豊かな「社会生活」を創造する資質や能力を端的に表した。

豊かな「社会生活」を創造する資質や能力



豊かな「社会生活」を創造する子どもの育成をめざして，本学校園の教育活動において大切にしたい力や資質を焦点化した。

知識・技能を各教科を中心に習得し，それを基盤としそれを活用し，思考力・判断力・表現力を育成する。そして，一人ひとりに育まれたその力を次なる課題や日常のくらし，社会生活へといかすことで，これらの力は探究的な活動を実現するとともにスパイラルに高まっていく。その一つの現れが，学校園の行事や活動を企画したり実行したりする力と考える。その一連の流れの中には，子どもたち自身が主体的に取り組むための学び方や追求力が欠かせない。また，班活動やグループ活動といった小集団から学級，学年，各校園，そして学校園全体と大きな集団まで，常に人との関わりで学校園の生活をよりよく行う上で，道徳性や人間関係力がその中心にしっかりと育まれていなくてはならない。

そして，これらの力は，幼いころは家庭や地域が土壌となり育まれてきたが本学校園に入ると同時に，本学校園にも根を下ろし，初等部前期・初等部後期・中等部という教育研究ブロックを通してそれぞれの成長過程に応じて年輪が年々増えるがごとく育っていくと考える。それは「豊かな『社会生活』を創造する」子どもの姿となり，大きく枝葉を広げるものと考える。

活用力 … 知識・技能を活用する力も含め，次なる課題や日常のくらし，社会生活へといかす力
人間関係力 … 他者の意見を尊重したり，他者とともに創りあげたり，他者とよりよく関わる力
道徳性 … 社会規範を大切にする心や自他を思いやる心
学び方 … これまでの自分や今の自分をふりかえり，これからの新しい自分を見つけていこうとする意欲や資質
追求力 … 出会った事象から見つけ出した課題に対して自分の考えをもち，その解決に向けこだわりをもって探し続けたり，調べ続けたりする力
企画・実行力 … 目的や願いに沿って計画し，それを実現する力

2　一貫教育完成期（平成25年度）へ向けた研究の計画

研究主題　　豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究

研究副題(1)　　豊かな「学び」をつくる子どもの育成

	研究副題(2)	確かな学力の育成	社会力の育成
平成20年度（一年次）	**～子どもの学びをとらえる～** 豊かな学びをつくる子どもの姿の確定・子どもの育ちを教師の視点からと子ども自身のとらえとの両方からさぐる。	とらえた子どもの育ちをもとに，保育や授業を構想し，学力の育成と社会力の育成を図る。	
平成21年度（二年次）	**～子どもの学びをつなぐ～** ・思考力・判断力・表現力を子ども同士のかかわり合いを通して教科学習を中心に育成する。 ・社会力について，３つの研究領域〈保育・生活・総合〉〈道徳〉〈特別活動〉を中心に育成する。	思考力・判断力・表現力を整理する。 かかわり合いの中で育てる。	〈保育・生活・総合〉〈道徳〉〈特別活動〉の関連性 教育研究ブロックと研究領域をクロスさせて，教育研究ブロックごとの発達課題をさぐり，取り組みの構想に生かす。
平成22年度（三年次）	**～子どもの学びをつむぐ～** ・思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするための学び合いと教師のはたらきかけのあり方をさぐる。 ・〈保育・生活・総合〉と〈道徳〉，〈特別活動〉と〈道徳〉とのつながりを整理し，社会力の育成に向けた保育や授業を構想する。	思考力・判断力・表現力の11年間のつながりを整理する。 よりよい学び合う場面の構想と教師のはたらきかけをさぐる。	３つの研究領域のつながりを具体的な活動を通して整理し，明確化できるように，年間指導計画や具体的な活動を見直す。
平成23年度（四年次）	**～子どもの学びを開く～** ・思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするための学び合いと教師のはたらきかけのあり方をさらに明らかにする。 ・「社会力」における資質や能力を教育活動全体を通じて育てる資質や能力に含め，研究の全体構想を構築する。	教育研究ブロックごとに整理した思考力・判断力・表現力を，「単元・題材配列表」に盛り込み，保育や授業の実践を通して，具体的に子どもの変容をとらえ，その育ちや高まりを明らかにする。	これまで整理してきた「社会力」における資質や能力を教育活動全体を通じて育てる資質や能力に含める。
平成24年度（五年次）	**～学びを拓く子どもの姿を求めて～** ・研究の全体構想からおりてくる，保育・教科・領域で育てる内容に視点をあて，これまで（４年間）の成果をふまえ，子どもが今までの学びを自分自身でいかせるよりよい学びのあり方を実践を通してより明確にする。		
平成25年度	○これまで（５年間）の研究の成果を総括し，その成果を公表すると共に，一貫教育完成期として，新たな課題へ取り組む１年目とする。		

平成20年度，「子どもの学びをとらえる」とし，保育・授業を構想する上で，また，保育・授業を進めていく上で，子どもをしっかりととらえ，それをいかしていくことのよさを実践を通して明らかにすることができた。

続く平成21年度は，「子どもの学びをつなぐ」とし，子ども一人ひとりにおける11年間の力の育成について整理することができた。

11年間で育てる力をつないでみたとき，そのつながりは，個と個の学びの「つながり」，時系列における個内での学びの「つながり」，個と学びの対象との「つながり」など，さまざまな「つながり」の重要性が見えてきた。そこで，平成22年度は，「子どもの学びをつむぐ」とし，平成21年度につないだものを，より広くより深く，より関連づけることをねらいとした。

そして，今年度平成23年度は，このより広くより深く，より関連づけられた子どもたちの学びが，教師側から与えたものではなく，一人ひとりの中でよりしっかりとした力になり，一人ひとりにとってよさを感じたり価値のあるものとなったりすることを「開く」と定義づけ「子どもの学びを開く」という副主題を掲げ，昨年度の研究内容をより深めた一貫教育を進めていこうと考えた。

具体的には，教育研究ブロックごとに整理した思考力・判断力・表現力について，単元・題材配列表と関連づけることで，それらの力とカリキュラムが一体となった取り組みになり，より深く確かな実践にする。また，子どもたちの「学び合い」を中心とした保育や授業の構想，そしてその「学び合い」の中での教師のはたらきかけによる思考力・判断力・表現力の育ちや高まりをより確かにとらえることで

子どもたちにとってよりしっかりとした力となる。また，これまで「社会力」に関わって整理してきた内容をもとに，本学校園全体で育てたい力を考えていくことは，これまでの取り組みを基盤としたよりしっかりとした全体像を構築することになる。

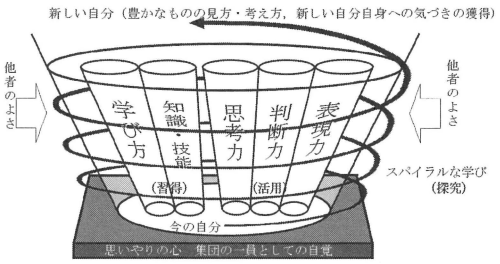
以上のように，子ども一人ひとりを「とらえ」，11年間の力を「つなぎ」，そのつながりをしっかりと「つむぐ」ことで子どもの豊かな学びの姿が明らかになった。そして今年度，実際にその力が文面だけでなく，また意欲的ではない学びではなく，子どもたち一人ひとりに確かな力となり，自信をもって主体的に学んでいる子どもたちに育っていくこと，つまり子どもたちの体の中に学んだことが「開く」ことをめざす。しかし，これで終わってはいけない。このようにして子どもたちに育った力を，子どもたちが自らそれをいかすことで，真に生きた学びの姿となる。これを，子どもたちが自分自身で学びを開拓するという意味でとらえ，平成24年度はそのような子どもの姿を「学びを拓く」とし，「学びを拓く子どもの姿を求めて」と副主題を掲げ，「豊かな学びをつくる子どもの育成」をめざして取り組んできた最終段階の１年としたい。

3　昨年度の研究

(1) 昨年度の研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究
豊かな「学び」をつくる子どもの育成　～子どもの「学び」をつむぐ～

豊かな「学び」をつくる子どもの姿のイメージ図



３年前から豊かな「学び」をつくる子どもについては，思いやりをもって，集団の一員であることを自覚し，知識・技能，学び方を習得し，思考力・判断力・表現力を活用しながら，課題解決をめざして，ものの見方や考え方，自分自身への気づきをより獲得することを求めて，学び続けていく姿であると整理し，昨年度も右図のイメージ図をもとにその育成に向けて取り組んだ。

幼小中の一貫教育を進める上では，まず子どもの実態を把握することが重要であると考え，平成20年度の「子どもの学びをとらえる」というサブテーマを設置した。子どもの思いや願いなどを教師がとらえ，それを保育や授業を構想したり展開したりする中で生かしていくことのよさについて各教科部でまとめることができた。

平成21年度はサブテーマを「子どもの学びをつなぐ」とし，「確かな学力」の育成と「社会力」の育成という２つの具体的な取り組みを中心に，子どもたちの11年間の育ちを整理した。

この２年間の取り組みをふまえ，昨年度は，個と個の学びの「つながり」，時系列における個内での学びの「つながり」，個と学びの対象との「つながり」などさまざまな「つながり」をより強固なものにしようと考えた。具体的には，「確かな学力」の育成においては，教育研究ブロックごとの思考力・判断力・表現力を保育・教科部で明らかにし，その力をよりよく育むために子どもたち一人ひとりの考えを確かにつなげ，学級全体での学び合いをつくりだすために，保育や授業の構想はどうあるべきか，また教師のはたらきかけはどうあるべきか実践を通して明らかにしようと考えた。

一方，「社会力」の育成に関わっても，一昨年度研究領域ごとに整理したことを，昨年度はそれぞれの領域をより関連づけることをねらいにおき，領域間のつながりを明らかにし，保育や授業の構想を立てることができた。

このように，昨年度は一昨年度「つないだ」ものを，より広くより深く，より関連づけながらつないでいくことを「つむぐ」と定義づけ，「子どもの学びをつむぐ」というサブテーマを掲げ，よりしっかりとした一貫教育を進めていこうと考えた。

(2) 昨年度の研究から見えてきたこと

①「確かな学力」の育成（思考力・判断力・表現力の育成）

○教育研究ブロックごとに育てたい思考力・判断力・表現力を明らかにして

保育・教科ごとに，思考力・判断力・表現力を教育研究ブロックごとに整理し，11年間のつながりを明らかにした。その結果，保育や各教科の特徴をふまえた上で，保育・教科の枠組みを超えた子どもの発達段階の特性があることが次のように見えてきた。

［初等部前期］

・子どもの学びの対象 … 遊びや生活に密接に関係している。

・思考力・判断力・表現力 …「やってみたい」という子どもの自発的な学びの意欲が追求の原動力となり，没頭して遊んだり体験したりすることで，自分なりの考えを確かにもち，それを素直に伝え合おうとする力

［初等部後期］

・子どもの学びの対象 … 身の回りの生活に関わる具体物である。

・思考力・判断力・表現力 … 学びの対象に直接はたらきかけて，自分なりの考えを明確にし，友だちの考えと比較したり考えを取り入れたりしながら，多様な表現方法を用いて工夫したり説明したりする力

［中等部］

・子どもの学びの対象 … 社会的なものや抽象的なものなど広がりを見せる。

・思考力・判断力・表現力 … 学びの対象に対して，自ら問題を見出し，様々な考えを取り入れながら論理的に考え一般化しながら最適な方法を見出し，相手に伝わるように発信していく力

○思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための単元構成について

思考力・判断力・表現力を育成するための学級全体での学び合いを成立させるためには，学び合いの場面だけでなく，活動や単元全体の構成が重要であることが，保育や各教科で共通して分かってきたことである。特に，活動や単元におけるねらいを明確にし，そのねらいに沿った展開の中で学び合いを位置づけていくことが大切である。

この明確な位置づけに基づいて，さらに学級全体での学び合いでは，学び合いのための視点を明確にすることが大切となる。子どもたちの思考は多岐にわたる。学び合いの視点が明確になっていないと，子どもの思考がずれたり，違う方向へと向かってしまう。一人ひとりの学びを変容させ，単元の目標に迫る学び合いの視点を明確にして保育や授業を展開するために，子どもの発達段階を考慮した上で，子どものとらえを教師がしっかりしておくことが必要である。

○思考力・判断力・表現力を育成する学び合いのための教師のはたらきかけについて

学級全体での学び合いの場面で，一人の子どもが表現したことを他の子どもへどうつなぎ，どう深めたり広げたりしていくかが教師のはたらきかけとして重要だと考える。

そこで，昨年度の実践から，次のような教師のはたらきかけが有効であったり，重要であったりしていることが見えてきた。

保育 … 子どもの思いを認めた上で，［認める，ほめる，うなずく］
遊びをふりかえるような声がけをし，自分の考えを確かにもたせる。
［問い返す，掘り下げる］［待つ，見守る］

初等部前期 …「“こうすると”ってどうすること？」「今言ったことはどういうこと？」といった言葉を投げかけ，その子どもの考えをより具体的に，より根拠を明らかにしていくことで誰もが納得できるようにする。
［問い返す，掘り下げる］

［個の思いや考えがどこから生じたのかを明確にし，他者が理解するのを助ける］

初等部後期 … 一つの考えとの相違性や共通点に気づき，自分の考えと比べ新たな考えを築きあげることができるようにする。

［個と個の思いや考えを対比させ，共通な部分や違いを明らかにする］

他に … 教師が子どもたちの学びをコーディネイトするような存在として関わる。

［子どもの意に沿いながら，ねらいに向けて方向づける］

子どもの発言を復唱・要約・引用などによって考えをつなぎ，思考を深めていけるようにはたらきかける。

［復唱する，要約する，引用する］

このように，初等部後期までに教師のはたらきかけにより培ったことを，中等部では，教師のはたらきかけを待たずに子どもの中で［問い返したり］［掘り下げたり］［提案したり］できることが大切なことだと考える。

以上のように，思考力・判断力・表現力を育てるための学び合いを成立させるための保育や単元の構想，教師のはたらきかけに視点をあて研究を進めてきた。そのよさは認めつつ，まだ不明確なところもある。また，思考力・判断力・表現力が育ったかどうか，より客観的に評価し，そのよさをより明確にすることも重要なことであることが分かった。そして，何よりも子どもたち一人ひとりに思考力・判断力・表現力が自分のものとしてしっかりと身についていくことが重要だと考える。

②「社会力」の育成（研究領域を中心とした取組）

本学校園では，「社会力」を「自分が将来身を置くであろう社会において，人が人とつながり，よりよい社会を築いていこうとする力」ととらえてきた。そして，「社会力」には，社会の運営に積極的に関わっていく力，よりよい社会をつくっていこうとする意志・意欲，そのような社会を考える構想力，実際にその考えを実現・実行する資質能力などが含まれると考えている。これをもとに，教育研究ブロックごとに，次のように育てたい力を定めた。

	教育研究ブロックごとに育てたい力
初等部前期	仲間とともに活動する喜びを味わい，素直に満足感を得ながら活動する力
初等部後期	所属する集団の一員であることを感じ，所属集団の中で自己を生かし，行動する力
中　等　部	自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと，みんなのくらしをよりよくするために考え，構想をもち，実現に向けて進んで行動する力

昨年度は，それぞれの領域の関連性を中心に検討することによって，３つの研究領域を「つむぐ」ための素案をつくった。

道徳部会では，〈保育・生活・総合〉と〈特別活動〉の活動でも，「思いやりの心」を視点にあてるため重点目標を見直した。その結果，まず，重点目標であった「健康や安全に気をつけ，規則正しい生活習慣を身につける。」（初等部前期）「自分の生活をよりよくしようとする態度を養う。」（初等部後期）「望ましい生活集団を身につけ，自主的，自律的に行動することができる。」（中等部）を今年度は基本的な生活習慣ととらえ，教育研究ブロックの土台として位置づけた。そして，教育研究ブロックごとに昨年度定めた重点目標を区分した「自分を思いやる」（初等部前期）「仲間を思いやる」（初等部後期）「社会を思いやる」（中等部）につなぐことで，「思いやりの心」が成長するにしたがってより広い範囲の人とつながるよう設定した。これを実際の年間指導計画に反映させることで，実践し検証するときの，明確な視点となるようにした。

保育・生活・総合部会では，「こだわり」「かかわり合い」「ふりかえり」のある追求から身につく力と社会力との関連性を整理し，それをもとに，それぞれの教育研究ブロックでめざす姿を明らかにし，

11年間で育てる子どもの姿をイメージした。そして，その姿に照らし合わせた活動計画を道徳の重点目標と照らし合わせながら作成した。すると，保育の２年間の活動で現れる心情面も，道徳で重点目標を「自分を思いやる」→「仲間を思いやる」→「社会を思いやる」という一連の流れをたどるように組むことが大切ではないかという結果に至った。保育においても，子ども自身の安定，つまり自尊感情の育成を基盤とし，その上に友だちの存在を受け入れることができると考えた。生活科においても「自分自身への気づき」が重要となり，生活科の目標をめざす上で，「自分を思いやる」心情の重要性がはっきりした。初等部前期でしっかりとした「自分を思いやる」心情を培い，そして，初等部後期から中等部へかけ，「仲間を思いやる」から「社会を思いやる」という心情を育みながら，追求する活動を行うことが大切だと考えた。

特別活動部会では，本学校園での特別活動における11年間の学びを通して育つ子どもの姿を定め，そこで育つ資質や能力を「６つの力」として整理してきた。昨年度は，各学年の活動から特別活動で育てたい力や気もちを視点に，それぞれで中心となる活動を選定し，活動計画を作成した。特別活動で育てたい力とともに気もちにまで視点をあてることで，道徳の重点目標と関連させ，表面的な活動の成果にとどまることなく，しっかりと子どもの育ちを検証できる計画案となった。そこから，活動の原動力としての自尊感情の重要性がはっきりした。また，特別活動において，ふりかえる場面でも「自分を思いやる」心情が高まると推測できた。さらに，11年間をつなぐことで，教育研究ブロックの移行期である小２から小３，小５から小６への特別活動におけるつながりや初等部後期では小３が，中等部では小６が起点になっていることなどが見えてきた。一方，中心の活動として小学校の体育会と中学校の運動会をつないだことで，小６から中１でつけたい力を共通理解しながら，その活動を設定していく必要性があることも明らかになった。

社会力の育成に向けて以上のように考えてきたとき，教育研究ブロックごとに育てたい力は，教育活動全体を通じて育てる「豊かな『社会生活』を創造する資質や能力」の道徳性や人間関係力，企画・実行力と関わりが深く，さらに他の資質や能力と密接につながり合って育つものであることが見出せた。そこで，今年度は，「豊かな『社会生活』を創造する資質や能力」に含めて社会力を考えていくことにした。昨年度，研究領域で作成した年間指導計画や活動計画は，その資質や能力を育てるために実践したり，育ったかどうか検証したりするためのものと考える。今年度，この資質や能力を整理したことで，その年間指導計画や活動計画を実践する視点が明確になったと考えている。

４　本年度の研究

(1) 本年度の研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究

副主題　豊かな「学び」をつくる子どもの育成　～子どもの学びを開く～

〈研究のねらい〉

先述した昨年度までの取り組みをふまえ，より広くより深く，より関連づけてつむがれた子どもの学びを子ども自身に根をおろさせる年だと考える。昨年度整理した保育や各教科における教育研究ブロックごとの思考力・判断力・表現力により，その保育や教科内で段階的にかつ系統的につむいだ。また，教育研究ブロックごとの特性もうかがうことができた。

また，学び合いの成立に向けて，保育や単元の構想で大切なことやその場面における教師のはたらきかけで大切にすべきものも見えてきている。この一人ひとりに備わった力が，教師から与えられたものではなく，一人ひとりの中でよりしっかりとした力となり，意味のあるものにしていかなければならない。そこで今年度は，思考力・判断力・表現力が一人ひとりの中でよりしっかりとした力になり，一人ひとりにとってよさを感じたり価値のあるものとなったりすることを「開く」と定義し，「子どもの学びを開く」という副主題を掲げ，昨年度の研究内容をより深めた研究となるよう考えた。

例えば，学習内容を理解し，与えられた問題や課題について正解をただ単に出せる子どもを育てることをめざすのではなく，学習内容が分かったときに，「ああ，そうなんだ」「なるほど」というように，その内容について感動とともに理解したり，「こんな場面ではこの考えは使えないかな」「あの場面で使えそうだ」など次にいかそうと自分で思えるほど理解したりすることを，一つの子どもの学びが開いた状態だと考える。そのためには，単元・題材配列表をもとに保育や授業を計画的・系統的に実践し，子ども一人ひとりの成長を見通すことが重要だと考える。また，子ども一人ひとりに確かに思考力・判断力・表現力が育まれたか明らかにするために，学習評価も工夫し，保育や授業の改善に努めていくことが必要だと考える。

(2) 取組の実際

思考力・判断力・表現力の育成　～保育や教科を中心とした取り組み～

子どもたちの学び合いを通して思考力・判断力・表現力を育成したり高めたりするために，保育や授業の構想とその中での教師のはたらきかけをどのようにしたらよいか，昨年度見えてきたことをもとにさらに深めていく。

昨年度の取り組みにおいて，学級全体での子どもたちの学び合いは，思考力・判断力・表現力の育成に有効であることが明らかになってきた。しかし，思考力・判断力・表現力が育ったかどうかは，子どもの姿を通した分析が中心で，学級全体の伸びや学級全員の一人ひとりの変容については不十分であった。思考力・判断力・表現力の育成は，先にも述べたように重要な課題である。そこで，本年度は，昨年度，保育や各教科で整理したり実践したりする中で明らかになったことや課題に対して，さらに実践を重ね，客観的に子どもの変容をとらえ，より確かなものとなるよう検証する。そして，一人ひとりに思考力・判断力・表現力がしっかりとした力となるよう育てる。

具体的には，次のことに重点をおく。

子どもたちが学び合う場面を構想する際，単独でその場面のみを構想するわけではない。一つの保育または授業を行うとき，学び合う場面に至るまでの過程も重要となってくる。また，学び合って終わるわけではなくその後の過程も重要となる。つまり，学び合う場面がよりよいものとなるためには，その全体の構想がしっかりしていなければならない。昨年度の実践から保育や各教科において，その特性を生かした取り組みが行われ，保育や授業を構想する上で大切にすべきことが見えてきている。そこで今年度は，よりよい保育の構想や授業の構想はどうあるべきかを昨年度の実践を踏まえさらに検証を加え明らかにし，子ども一人ひとりの思考力・判断力・表現力をしっかりと育てる。

よりよい保育の構想や授業の構想があったとしても，子どものとらえが不十分であり，教師のはたらきかけが適切でなければ，よりよい学び合いとはならない。つまり，思考力・判断力・表現力がよりよく高まってはいかない。子どもたちに多角的に視点を広げさせたり，より深く考えさせたりしたいと考えたときに教師が行うはたらきかけにはどのようなものがあるのかを昨年度の実践を踏まえ検証を加え，明らかにする。さらに，保育や教科で共通するものや特有なものを見つけていくことによって，保育や授業づくりの質を高めていくことができると考える。

「学び合い」を成立させるためのはたらきかけには，次のようなものがあると考え実践を行ってきた。

○一人の子どもに対して行うはたらきかけが全体の学びへとつながるもの

その子のよさを受け止める　［認める，ほめる，うなずく］
その子自身に考えさせる　［待つ，見守る］
その子の内面に気づかせる，考えを整理する，背景を引き出す　［問い返す，掘り下げる］
その子にない新たな考えに気づかせる　［提示（提案）する］
その子の考えに対し，教育的な観点から方向づける　［価値づける］
その子が自分で考えを導き出す時間を保障する　［待つ，見守る］

○個と個の思いや考えをつむぐはたらきかけ

○個と個の思いや考えを対比させ，共通な部分や違いを明らかにする ○個の思いや考えがどこから生じたのかを明確にし，他者が理解するのを助ける

その中で昨年度明らかになってきたことは，次のとおりである。

まず，学び合う場面において，何を学び合うのか焦点をあてていくはたらきかけが重要である。そしてそのためには，特に［提案する］［掘り下げる］というはたらきかけが有効であることが分かってきた。［掘り下げる］はたらきかけは，子どもの考えが分散したり，ぼんやりとしたりしているときに行うことで，子どもの考えを明確なものとしていくことができる効果がある。学び合いにおいて，子どもたちが表した考えをねらいに沿って明確にすることは，他の子どもが自分の考えと比べて共通性や相違性を明らかにでき，一つの考えをより深めたり広げたりするという効果がある。［提案する］はたらきかけは，子どもたちの考えが偏ったり不十分だったりしたときに，より広げたり違う視点を与えたりするはたらきかけのことで，よりねらいに向かった学び合いを実現できる。

今年度は，このようなことをふまえ，保育構想や単元構想とはたらきかけをねらいに沿って焦点化し，その過程で学び合いを成立させるために大切なことを明らかにしていく。

思考力・判断力・表現力が育ったかどうかは，昨年度は主に子どもの姿から分析した。今年度はそれに加え，学級全体の伸びや個々の変容をとらえ，思考力・判断力・表現力の高まりをより明確なものにしていき，一人ひとりの子どもに意味をなすものとしてしっかりと根付かせる。

具体的には次のような学び合いによる思考力・判断力・表現力の評価に関して，提案していきたい。

○教師のはたらきかけによる学び合いによる変容を子どもの姿からとらえる。

昨年度実践記録の中で考察した内容に多く含まれているものとして次のものがある。

〔例　授業記録　相互作用分析　子どもの記述の分析〕

○個々の思考力・判断力・表現力の育ちや高まりを，できるだけ客観的にとらえる。

評価規準を明確にし，そこから評価基準を設定し，それを子どもの思考力・判断力・表現力に照らし合わせる。そして，授業記録や相互作用分析，子どもの記述の分析を少しでも客観的に考察するためのものとする。

そのために，ここで用いる評価基準は，ＰＤＣＡサイクルのＣ（Ｃｈｅｃｋ）を重視し，児童生徒の学習状況の評価，それをふまえた授業や指導計画等の評価を目的とする。したがって，思考力・判断力・表現力を育成するための学び合いの学習が有効だったかを評価し，改善に役立てるために，評価基準に「Ａ」「Ｂ」「Ｃ」を示し，具体的な子どもの姿を記述していく。

また，以上の研究を推進するために，本学校園では昨年度と同様に以下のような保育・教科部会を設ける。

○保育部会　○国語科部会　○社会科部会　○算数・数学科部会　○理科部会
○音楽科部会　○図画工作・美術科部会　○体育・保健体育科部会　○技術・家庭科部会　○外国語活動・英語科部会

保育は，すべての教科へとつながっていく素地が育まれる段階ととらえ，本学校園では保育部会として，その研究を進めている。

（文責　仙田　淳一）